

# 橋の文化的意味

—聖と俗の架け橋—

雨宮久美

Kumi AMEMIYA. A Cultural Meaning of a Bridge—a bridge between the sacred and the profane. *Studies in International Relations* Vol. 35, No. 1, October 2014, pp. 29–40.

Since antiquity, the human being has flourished around rivers and waterfronts. The four great civilizations were born with the support of rivers. Inevitably, mankind invented a way of living and transport using boats and bridges. Bridges and ships did not end their roles as mere conveniences, but also became metaphors in the human imagination with their defining function of connecting one point to another.

When did the bridge come to symbolize, in mythology and folklore, bridging the gap between the world of enlightenment and the world of earthly desires, the celestial and the terrestrial?

In this paper, I explore the semiotic relationship between the Japanese people and the bridge through perspectives of Shintoism, folktales, folklore, Buddhism, and entertainment. I seek to reveal the varieties of representation of the bridge in historical and cultural contexts, and then uncover its symbolism as the boundary of the profane and the sacred worlds.

## 序

人類は、川を中心として繁栄してきた。四大文明も河に支えられて生れた。川や水辺で生活をするために人類は必然的に船や橋という交通や生活のための手段を発明した。船や橋は単なる生活のための便宜に終らず、一つの地点ともう一つの地点をわたすというその役割から、人類にさまざまな想像力を与えてきた。

大河、もしくは、川の彼岸と此岸の架け橋となる橋はいつ頃の時代から存在したのだろうか。橋の研究をし、橋梁工事にも参画した川田忠樹の『橋と日本文化』によれば、以下のような指摘がある。「橋と人間とのかかわり合いは古く太古の時代、まだ文字による記憶のない文明以前から存在したのである。」<sup>1</sup>川田は、日本でも縄文時代、弥生時代の遺跡より考古学的発見としての橋が、発見されている例を挙げている。さらに日本最古の橋は、「江上A遺跡（弥生時代後期）から出土したもので、今から一八〇〇年ぐらい前のものと推定されている。幸いなことに保存状態がよく、ほとんど架け

られたままの姿で出土した」<sup>2</sup>と記している。

本稿では、日本の橋の文化を探ることで日本人と橋の関わりを神道、説話、民俗学、仏教、芸能の領域から探る。これにより、建造物としての橋の物質的な面ではなく、橋が聖なる世界と現世的な俗の世界との境界性を象徴していることを明らかにする。

## 一、神話の橋—天の浮橋

『古事記』には、三つの重要な場面で天の浮橋が登場する。最初に伊邪那岐命と伊邪那美命は、「天の浮橋」に立って最初の国を創ったことが『古事記』上巻「淤能碁呂島」に記されている。

是に、天つ神諸の命以て、伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱の神に詔はく、「是のただよへる国を修理ひ固め成せ」とのりたまひ、天の沼矛を賜ひて、言依し賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろし

て画きしかば、塩こをろこをろに画き鳴して、引き上げし時に、其の矛の末より垂り落ちし塩は、累り積りて島と成りき。是、淤能碁呂島ぞ<sup>3</sup>。

次に天の浮橋が登場するのは、天照大御神の命により、天忍穂耳命を下界を統治させるために遣わす場面である。『古事記』「葦原中国の平定」を以下に挙げる。

是に、天忍穂耳命、天の浮橋にたたして、詔はく、「豊葦原千秋長五百秋水穂国は、いたくさやぎて有りなり」と、告らして、更に還り上りて、天照大神に請しき<sup>4</sup>。

天忍穂耳命は、天の浮橋まで来て様子を伺って見たが、下界はとても騒がしい状態だと言って高天の原へ引き返してしまう。この例から天の浮橋が天界と下界との境界として位置づけられていることが理解できる。

さらに天照大御神によって天孫邇々芸命を天降らせる「天孫降臨」の場面にも天の浮橋が現れる。

故爾くして、天津日子番能邇々芸命に詔ひて、天の石位を離れ、天の八重のたな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋に、うきじまり、そりたたして、竺紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降り坐しき<sup>5</sup>。

この天の浮橋について諸注に、「天と地との間にかかった橋（略）「天の浮橋」となると急に幻想味がゆらゆらと立ちのぼるのは、それが重力を失って虚空にかかるに見えるからであろう」<sup>6</sup>、「天地をむすぶはしご（略）ハシは空間的に離れたところの間を結ぶものを意味するが、水平の場合にもいった」<sup>7</sup>、「天空に浮かんだ橋。高天原から地上世界に特別な神が天降るに際して立つ場としてあらわれる。通路ではない。」<sup>8</sup>、「天地の間にかかる梯はし。ハシは垂直にも水平にも二点を結んで連絡するもの。ウキは虚空にかけられたためにいう。」<sup>9</sup>、「天空に浮き架けられた橋。」<sup>10</sup>、などとする。

諸注は天地の間にかけてられたものか、天空に浮

かんでいるものかで解釈が二つに分かれるが、天の浮橋は、神々の住む天上世界と人間の住む地上世界を結ぶ文字どおりの橋また梯として解釈している。二つの世界の接点、つまり境界を認めて、その二つの世界を結ぶ通路が橋だと古代人が考えていたことは明らかであろう。

川田忠樹『橋と日本文化』第一章「初めに『はし』ありき」には、「天の浮橋は虹か」と記している。川田は、『古事記』『日本書紀』に、天の浮橋の構造に関する具体的な記述が無いことを指摘している。

『丹後国風土記』逸文を以下に挙げる。

丹後の国の風土記に曰ふ、与謝の郡。郡家の東北の隅の方に速石の里あり。この里の海に長大き前あり。長さ一千二百二十九丈、広さ或る所は九丈以下、或る所は十丈以上二十丈以下なり。先つ名をば天椅立といひ、後の名を久志浜といふ。然云ふは、国生みたまひし大神伊射奈藝の命、天に通行はむとして椅を作り立てたまふ。故、天の椅立と云ふ。神の御寝坐す間に仆れ伏しぬ<sup>11</sup>。

「天を通はむ」のために作られたので「天椅」と呼んだとする。川田はこの一節を踏まえて持論を以下のように提示している。

ここでは天の椅（橋）立は、はしごだったということになるわけだが、実は寝ている間に倒れてしまったというところが、昼寝や仮眠など、ほんの少しの間に消えてしまう虹を想像させるという大林太良氏の指摘もある。筆者もこの虹の橋説に同感である。それは日本文化の源流と考えられる地域、すなわち韓国、台湾、中国、インドネシア、ポリネシアといった広い地域にわたって、虹の橋という神話・伝説があまねく分布していることが知られているからである<sup>12</sup>。

川田の引用している大林太良『銀河の道虹の架け橋』では、安間清の虹の民俗の研究（『虹の話 比較民俗的研究』）も参照して、民間には虹を橋と見

る考えがあったと指摘し、さらに「虹の橋の観念は古代においては天浮橋として現れる」と論じている。大林は、北欧神話のビフレスト Bifröst の橋に比したカール・フローレンツの解釈やそれにイランのチンヴァット Cinvat の橋の例も加えたラファエレ・ペッタツォーニの解釈により、天の浮橋は、虹を表象したものだとして結論づけている。日本とはあまり関係のない遠くの民族の事例だと二人の説を批判した松村武雄に対して、大林は日本の周辺の民族にも虹を橋と見る考えはあったとして、例えば中国の事例を挙げている<sup>13</sup>。

川田は、さらに蒙古神話と北欧神話の例も挙げ、虹が天に架けられた橋であるという説について「虹が天国に架けられた橋だとする発想は、私達東洋人だけのものではなくて、もっと普遍的なもののようである。」<sup>14</sup>と指摘している。

東アジアに広く虹を橋の表象とみる民族があったことは確かである。しかし論者は、天の浮橋が虹であるとする川田の説を否定する。

天の浮橋を虹として捉えるために民間伝承を援用し、比較神話学の視点から人類文化の普遍性に立って解釈するのはどうであろうか。『古事記』は、上代の文献であるからその時代の文脈の中で考えていかなければならない。二神による国生みは、創世神話の核心をなす部分なので、そこに虹の表象が出てくるには虹が重要な観念であるという裏づけがなされねばならない。『古事記』には、一例も「虹」の用例は出てこない。そもそも上代の文献に虹の用例が少なく、『日本書紀』雄略天皇三年条に一例ある「虹」の用例は次のような話である。懐妊の疑いを掛けられた伊勢齋宮栲幡皇女が神鏡を持ち出し五十鈴川のほとりで縊死する。行方が分からない皇女を探していると、上流で蛇のような虹が立ったのでそこを掘ると、神鏡とその傍らに皇女の屍があった。蛇と虹とが関わり深いことは民間の習俗からも確かめられる。河村秀根『書紀集解』巻十四に「按靈異之物所<sub>レ</sub>隱没<sub>レ</sub>必有<sub>レ</sub>氣而見是其精也」<sup>15</sup>と解釈するように、靈威のある神鏡の発する気が虹として表象されているのだろう。いずれにしても神話の核心を担うような重要な観念に虹が支えられているとはいえないのである。

前述の思想大系本『古事記』では、船・虹・岩

梯などの実体説を否定し、天井と地上とを結ぶ神々が往来する通路が梯子状のものであったことは、上代の伝承や神社建築からも確証できるとして、「イザナギ神が「天為<sub>レ</sub>通行<sub>レ</sub>而椅作立」てていた梯子が倒れて砂洲（天椅立）になった例（丹後風土記逸文）ほか、播磨風土記、印南郡条の八十橋や、天二上命が「小橋」を通過して天上に水をもらいにゆく話（大同本記逸文）、天孫が「天能<sub>レ</sub>梯建」によって降臨（続後紀、嘉祥二年条の興福寺の僧の寿歌）などの例がある。これも天上にとどく梯子と解される。なお、古代の梯子は登呂遺跡等の出土例や伊勢神宮の御稻倉等で現在も用いられている例のように、太い角材に刻みつけたものである。」<sup>16</sup>と述べている。

前述の西郷『注釈』は、天の浮橋を虹とするのは、「解釈態度としてよくない」とした上で、前掲の『丹後風土記』と、「この里に山あり。名を斗形山と曰ふ。石を以ちて斗と乎氣とを作れり。故れ、斗形山と曰ふ。石の橋あり。伝へて云はく、上古の時に、この橋天に至り、八十人衆、上り下り往来ひき。故れ、八十橋といふ」<sup>17</sup>とある『播磨風土記』を引用し、「天地のへだたりまだ遠からず、その間を往反すること可能だと考えていたわけだ」と指摘し、「ホノニギの命も、この天の浮き橋よりして高千穂の峯に天降った。蔓や綱をつたって天に上ったという型の昔話が残っているのも、天地いまだ遠からざりし世の記憶をとどめたものである。」<sup>18</sup>とまとめている。

西郷はさらに神話特有の表現に注意し、記紀とともに、「天の浮橋に立たして」というフレーズが「一つの決り文句になっていたらしい」と指摘し、天の浮橋「『立たして』といつも表現されるのは、この句が特定の祭式、すなわち高天の原からの降臨の祭式に由来することを暗に示すものではなからうかと思う。」<sup>19</sup>と述べ、神話の背景に祭式があったことを論じている。

## 二、説話の橋—異人の形象と境界

橋が異界への入り口であり、異人の出没する境界領域であることは中国古代の神仙伝や小説に描かれている<sup>20</sup>。このように二つの世界を架け渡す

橋の説話は、院政期の『今昔物語集』にも見られる。

平林章仁『橋と遊びの文化史』第一章「鬼が出る恐ろしい橋」<sup>21</sup>に近江の勢田橋、近江の安義橋、京の一条戻り橋が取り上げられている。これらの物語は、橋で鬼と遭遇した説話である。鬼と遭遇する物語は、この他にも『宇治拾遺物語』巻一第十七「修行者、百鬼夜行に逢う事」のような摂津と肥後を越境する話や、『今昔物語集』巻二十九第十八「羅生門登上層見死人盗人語」のように都の内と外の境界での話など境界性が特徴となっている。

本節では、京都一条戻り橋と近江の安義橋、勢多橋と鬼の物語を確認する。人類学の手法で新しい妖怪学を提唱する小松和彦『妖怪文化入門』には、語としての来歴も古く、民俗現象としても複雑な様相を持つ「鬼」の多義性について、次のように記されている。

「鬼」は、いいかえれば「鬼」という語は、長い歴史をもっている。早くも「記紀神話」や『風土記』のなかに登場し、古代、中世、近世と生き続け、なお現代人の生活のなかにもしきりに登場している。ということは、当然のことながら、長い歴史をくぐりぬけてくる家庭で、この言葉の意味が多様化した、ということ想定しなければならないだろう<sup>22</sup>。

小松の指摘からも分かるように、鬼は日本人の心意の中に深く浸透している。さらに小松は、「鬼の姿を彫った図像のもっとも古いものは、仏に踏みつけられる鬼の彫刻である。また『北野天神縁起絵巻』に描かれた地獄の獄卒や雷神の姿かたちも、現代人が思い描く鬼とほとんど同じ」<sup>23</sup>であると鬼の図像イメージの原点を挙げている。

最初の橋の物語は、京都一条戻り橋で若者が一条堀川の橋で百鬼夜行に出会うというものである。『今昔物語集』巻十六第三十二話「隠形男依六角堂観音助頭身語」に信心の深い男が十二月の大晦日の夜に知人宅を訪ね、夜更けに帰宅中、一条堀川の橋で鬼に遭遇する物語である。

今昔、何レノ程ノ事トハ不知ズ。京ニ生侍ノ年若キ有ケリ。常ニ六角堂ニ参テ懃ニ仕ケリ。而ル間、十二月ノ晦日、夜ニ入テ、只独リ知タル所ニ行テ、夜深更テ家ニ返ケルニ、一条堀川ノ橋ヲ渡テ西ヘ行ケルニ、西ヨリ多ノ人、火ヲ燃シテ向ヒ来ケレバ、「止事無キ人ナドノ御スニコソ有ヌレ」ト思テ、男橋ノ下ニ忿ギ下テ、立隠レタリケレバ、此ノ侍、和ラ見上ケレバ、早ウ人ニハ非ズシテ、怖ゲナル鬼共ノ行ク也ケリ。或ハ目一ツ有ル鬼モ有リ、或ハ角生タルモ有リ。或ハ手数タ有モ有リ、或ハ足一ツシテ踊ルモ有リ<sup>24</sup>。

古代の民俗信仰として、「大晦日前後は祖霊が来訪する日とされ、魂祭を行った。また、追儼の行事に象徴されるように、悪鬼・悪霊が跳梁する夜でもあった」<sup>25</sup>と注に記されている。この物語は、鬼に姿を見えなくされた男が、六角堂の観音菩薩の靈験により元の姿に戻った話である。一条戻り橋は、晴明神社のすぐそばにある。平安京の北の端にあたり、柳がうっそうとして橋と通りの角度が屈折して渡りにくい橋であった（現在は整備されて当時の面影はないが）。戻り橋という名前の由来について、『撰集抄』巻七第五「仲算佐目賀江水堀出事（六五）」には、浄藏がこの橋で「観法」をして父親を冥土から蘇らせたことから名づけられたという話を伝える。

浄藏、善宰相のまさしき八男ぞかし。それに八坂の塔のゆがめをなほし、父の宰相の此世の縁つきてさり給ひしに、一條の橋のもとに行きあひ侍りて、しばらく観法して蘇生したてまつられけるこそ、つたへ聞くにもありがたく侍れ。さて、その一條の橋をば戻り橋といへる、宰相のよみがへる故に名づけて侍り<sup>26</sup>。

この一条戻り橋では橋占も行われていた。『源平盛衰記』巻第十「中宮御産」には、中宮徳子に「御産ノ氣」があり、一条戻り橋で「橋占」をさせたことが記されている。橋占は橋の袂で通行人の話す言葉を聞いて吉凶を占うことをいう。この時禿姿

の童たちがはやし立てたのは「摺ハ何摺国王摺、八重ノ塩路ノ波ノ寄摺」<sup>27</sup>という平家の栄華と没落を予言する言葉であった。一条戻橋では、さまざま不思議なことが起きるといふ話がこのほかにも伝わる。

二番目に挙げるのは、近江の安義橋である。『今昔物語集』巻二十七第十三話「近江国安義橋鬼噺人語」は、安義橋で出会った女の姿の鬼に一度は逃れるものの、再び弟に変身し現れた鬼に喰われるという物語である。

「此ノ国ニ安義ノ橋ト云フ橋ハ、古ヘハ人行ケルヲ、何ニ云ヒ伝タルニカ、今ハ、『行ク人不過ズ』ト云ヒ出テ、人行ク事無シ」ナド、一人ガ云ケレバ、オソバエタル者ノ口聞キ鏽々シク、然ル方ニ思エ有るケルガ者ノ云ク、彼ノ安義ノ橋ノ事、実トモ不思ズヤ有ケム、「己レシモ其ノ橋ハ渡ナムカシ。極ジキ鬼也トモ、此ノ御館ニ有ルーノ鹿毛ニダニ乗タラバ渡ナム」ト<sup>28</sup>。

滋賀県にある安義橋に鬼が出るという噂があり、話の弾みで男が肝試しを名乗りでる。橋を通ろうとすると噂の通り鬼が現れ、男の乗る馬に手をかけてきた。鬼の異様な姿は次のように描かれている。

男馳テ見返リテ見レバ、面ハ朱ノ色ニテ、円座ノ如ク広クシテ目一ツ有り。長ハ九尺許ニテ、手ノ指三ツ有り。爪ハ五寸許ニテ刀ノ様也。色ハ緑青ノ色ニテ、目ハ琥珀ノ様也。頭ノ髪ハ蓬ノ如ク乱レテ、見ルニ、心肝迷ヒ、怖シキ事限シ<sup>29</sup>。

怖ろしい鬼の風貌を瞬時に認めた男は必死に観音を念じてなんとか鬼から逃げ切ることができた。しかしいつかは捕まえるという鬼の恐ろしい予告の通り、弟に姿を変身した鬼に男は首をぶつりと切られてしまう。その後さまざまな祈祷により、鬼は退散し、安義橋には再び鬼がでることは無かったと話を結んでいる。脚注に、「橋や渡し場などは異界との境界で、妖怪・霊鬼が出現する場」<sup>30</sup>とあ

るように、橋は二つの世界を行き来する通路となっている。

三番目も鬼に追いかけられる話であるが、近江の勢田橋の側で宿っていたときに起きた話になっている。『今昔物語集』巻二十七第十四話「從東国上人値鬼語」は、「観音」の靈験譚を話の枠とするが、結末を欠いている。この話では、安義橋のような鬼の外形は描かれず恐ろしげな気配と声だけが表現されている。

極テ怖シ気ナル音ヲ挙テ「己ハ何コマデ罷ラムト為ルヲ。我レ此ニ有トハ不知ザリツルカ」ト云テ、追テ来クル。馬ヲ馳テ逃ル程ニ、見返テミレドモ、夜ナレバ其ノ体ハ不見エズ。只大キヤカナル者ノ云ハム方無ク怖シ気也。此ク逃ル程ニ、勢田ノ橋ニ懸ヌ。可逃得キ様不思エザリケレバ、馬ヨリ踊下テ、馬ヲバ棄テ橋ノ下面ノ柱ノ許ニ隠居ヌ。「観音、助ケ給ヘ」ト念ジテ、曲リ居タル程ニ、鬼来ヌ。橋ノ上ニシテ極テ怖シ気ナル声ヲ挙テ、「河侍々々」ト度々呼ケレバ、「極ク隠得タリ」ト思テ居タル下に「候フ」ト答ヘテ出来ル者有り。其モ聞ケレバ、何物トモ不見エズ<sup>31</sup>。

この瀬田橋の話では鬼の「河はいるか」という呼びかけに答えて何者かが出現する。物語終了部分が欠如のため何者の正体はわからないが、橋と川とそれぞれに異人がいることになり、異世界が重層化されていることが分かる。

上の三例からは、図像化される前の鬼の形象を抽出することができる。安義橋の鬼は人の恐怖心を反映したかのような異常な外貌で描かれている。瀬田橋の鬼は、闇から聞こえて来る不気味な声でその恐ろしさが描かれている。人間が避けたいと思っている鬼に出会うかもしれないのが橋である。二つの世界の結び目である橋ではなにが起きても不思議はないのである。小峰の指摘するとおり境界と呼ばれる両義的な場所には神や鬼がいて<sup>29</sup>、人間の動向を窺っているのである。

小峰は、「境界という場はすべて互換性があるとか、共通性があり、そういう場には神や鬼がいた」<sup>32</sup>と述べている。

前出の小松和彦『妖怪文化入門』には、「異人」とはなにか以下のように定義している。

「異人」とは、一言で言えば「境界」の「向こう側の世界」（異界）に属すると見なされた人のことである。その異人が「こちら側の世界」に現れたとき、「こちら側」の人びとにとって具体的な問題となる。つまり「異人」とは、相対的概念であり、関係概念なのである<sup>33</sup>。

小松が指摘するように、異界からみて人間界への入り口になる橋に異人が出現したとき、例えば鬼として対象化されることで初めて人間との関係性が生じることが『今昔物語集』の説話から読み取れるのである。

小峰和明は、境界に当たるものとして、峠・辻・隧道などいろいろあるが「その中でもいかに境界らしいのが橋、ということになる」<sup>34</sup>と、指摘している。これらの象徴物のもたらす境界の表象は、どちらかといえば水平的なものである。しかし、境界には仏教でいう彼岸と此岸のように、聖と俗とが交わる垂直的な境界性も考えなければならない。例えば、当麻寺の二十五菩薩来迎は、本堂から架け渡された橋を仏菩薩が浄土に導くため信者のもとに向かう行事であるが、来迎図では仏菩薩は紫雲に乗って空中から地上に向かう構図で表現される。仏菩薩の渡る橋には、目には見えないが浄土と地上との垂直的な対比が隠されているのだろう。もっとも境界らしい橋は、「異人」「異世界」との多様な境界性や両義的な性格を最も集約的に表現するトポス（topos）として捉えることができるのである。

### 三、橋の民俗学—異界の通路

『古今集』歌「さむしろに衣かたしき今宵もわれを待つらむ宇治の橋姫」にまつわる伝承は、『奥義抄』『色葉集』『八雲御抄』『頭注密勸』などの歌学書に載せられ<sup>35</sup>、橋姫といえば宇治の橋姫を連想するほどであるが、実は日本の各地にはさまざまな橋姫伝説が伝えられている。本節では謡曲の話題も出てくる山梨県の「橋姫」伝説を柳田國男の

「橋姫」を基に確認することにする。この論文は、橋姫の境の神としての性格を民俗学的に分析したものである。

柳田は、「橋姫」の冒頭において、橋にまつわる美しい女神の信仰があったことを以下のように指摘している。

橋姫と云ふのは、大昔我々の祖先が街道の橋の袂に、祀つて居た美しい女神のことである。地方によっては其信仰が夙く衰へて、其跡に色々の昔話が發生した。是を拾ひ集めて比較して行くと、些しづゝ古代人の心持を知ることができるやうである<sup>36</sup>。

橋の話として最初に登場するのが、山梨県甲府市にある「国玉の大橋」<sup>37</sup>（現存しない）と山梨県大月市にある「猿橋」の物語である。

柳田は、「此橋を通行する者が橋の上で猿橋の話をすると必ず怪異がある。猿橋の上で此橋の話をしても同様である。」と前置きして、旅人が猿橋を通過するときに、国玉の大橋の噂をしたら婦人が現れて、手紙を届けて欲しいと頼まれた。男が異変に気づき、手紙を見ると「此男を殺すべし」と書いあった。男は、「此男を殺すべからず」と書き直して国玉の橋にたどり着くとまた別の女が立っていたので手紙を渡したが、難を逃れることができたという話を引いている。現在の猿橋は、「刎橋」という手法により岩盤に穴を開け、刎ね木を斜めに差込みを積み重ねて造られている。橋脚を建てずに架橋するのが特徴になっている。木造建築で「刎橋」の手法で現存するものは、国の名勝指定されている山梨県大月市の猿橋のみである。



写真-1 「猿橋」（2014年6月21日撮影：加藤誉大）

「此橋の上で謡の「葵の上」を謡うと忽ち道に迷ひ、「三輪」を謡うと再び明らかになる」<sup>38</sup>とされたように、謡曲には橋姫の喜ぶものと嫌うものがあった。

さらに時代が経過するうちに変化し明治二十年前後には、「此橋の上を過るとき猿橋の話をして或いは「野宮」の謡をうたふことを禁ず、若し犯すときは必ず怪異あり」<sup>39</sup>とあるように別の謡曲に置き換えられている。

またさらにこの伝承が変化して、ある人が「野宮」を試しに謡ってみると、美しい乳呑み児を抱いた女性が現れて、子供を抱いて欲しいと頼まれ、顔を見上げると鬼女に変貌して食い付きそうな顔をしていたから一目散に逃げ帰り、玄関で気絶したという物語に発展していることを柳田は、「橋姫」において指摘している。

猿橋の橋姫伝説に謡曲の「葵の上」や「野宮」が出てくること、さらに美しい女が鬼女に変貌することは重要な点である。柳田は、橋姫と謡曲の関係を以下のように指摘している。

つまり「葵の上」は女の嫉妬を描いた一曲であつて、紫式部の物語の中で最も嫉妬深い婦人、六条の御息所と云ふ人と賀茂の祭の日に衝突して、其恨の為に取殺されたのが葵の上である。「野宮」と云ふのも所謂源氏物の謡の一つで、右の六条の御息所の霊をシテとする後日譚を趣向したものであるから、結局は女と女との争ひを主題にした謡曲を、この橋の女神がこのまれなかつたのである。「三輪」を謡へば再び道が明るくなると云ふ仔細はまだ分らぬが、古代史で有名な三輪の神様が人間の娘と夫婦の語ひをなされ、苧環の糸を引いて神の駿の杉木の上に御姿を示されたと云ふ話を作つたもので、其末の方には「又常闇の雲晴れて云々」或は「其関の戸の夜も明け云々」など云ふ文句がある。併し何れにしても橋姫の信仰なるものは、謡曲などの出来た時代よりもずっと古くからあるは勿論、源氏の時代よりも更に又前からあつたことは、現に其物語の中に橋姫と云ふ一巻のあるのを見てもわかるので、此には只どうして後世に、

そんな謡を憎む好むと云ふ話が語らるゝに至つたかを、考へて見ればよいのである<sup>40</sup>。

柳田の指摘のように、橋姫は女神である故に嫉妬からの女同士の争いの謡曲を好まなかつた。ここで重要なのは、橋姫の説話が平安時代の『源氏物語』の時代には既に定着していたという事実である。「抑橋姫ト申神ハ、日本國內大河小河橋守ル神也」<sup>41</sup>と、とあるように、長い歴史の中で各地に橋姫の信仰が広がり、さまざまな説話が生まれた。猿橋の橋姫もその一つである。

ねたみにまつわる話をたどると、もともと橋姫一人ではなく男女双神を橋に祀ったのが最初であると柳田は指摘する。夫婦二体の道祖神と同じように境を守る神として信仰されたのが橋姫である。

敵であれ鬼であれ外から遣つて来る有害な者に対して、十分に其特色を発揮して貰ひたい為であつた。街道の中でも坂とか橋とかは殊に避けて外を通ることの出来ぬ地点である故に、人間の武士が切処として爰で防戦をしたと同じく、境を守るべき神をも坂又は橋の一端に奉安したのである。しかも一方に於ては境の内に住む人民が出て行く時には何らの障碍の無いやうに、土地の者は平生の崇敬を怠らなかつたので、そこで橋姫と云ふ神が怒れば人の命を取り、悦ばば世に稀なる財宝を与へると云ふやうな、両面両極端の性質を具へて居るやうに考へられるに至つたのである<sup>42</sup>。

柳田の指摘するように橋は、異界の通路として捉えられていた。人々の往来にとって欠かすことのできない通路であるが、恐ろしい異人と出会うかもしれない場所でもあつた。それだけに境を守り、そこを通る人を守護してくれる存在として橋姫は信仰されていたのであろう。

#### 四、橋の神事—雨宮の御神事

橋の神事として国指定無形民俗文化財に指定されている長野県千曲市に鎮座するあめのみやにます ひよし雨宮坐日吉神社の祭り「雨宮の御神事」がある。この神事は、三

年に一度開催されている。生仁川に架かる齋場橋で行なわれるこの祭最大の山場である「橋懸かり」の所作について、鈴木正宗「橋をめぐる神事—雨宮の祭りを中心に一」に、「これは橋の上から獅子が逆さ吊りになり頭を流れに突っ込んで振り回し、水しぶきを上げて踊る勇壮な離れ技である。齋場橋とは、齋場（ゆば、いつきば）という名称から明らかなように神霊を送迎する場所であった。」<sup>43</sup>と指摘する。

「雨宮の御神事」では、齋場橋を舞台として四人の獅子に扮した人がバンジージャンプさながら逆さ吊りとなる「橋がかり」を見せ場とする神事である。この神社は、「昔はハウリ大権現（祝神社）」という名称で、近江の比叡山麓、坂本の山王社を勧請して以後は雨宮山王と呼ばれていたが、明治以降に現在の名称となった。<sup>44</sup>

「雨宮古老談」によると、由比の種津殿は、妻である雲井の前がいながらにして、里に住む美人と評判なお飛連という女性と密会をしていた。雲井の前は、このことを怨みながら亡くなり怨霊となり、災害が絶えず起こるようになった。そのため霊を慰撫するため社が建立された経緯について以下のように記す。

雲井の前甚だ妬ましく思い煩るゝ身を怨み侘びる思いの積もりてや終に身まかり給いしと云う後に其魂魄形を結び夜毎にあらはれ出て、忿怒の焰火に胸を焦し苦しみ給う事年を経て止まず見る人は皆狂乱となり又は死するもあり時ならぬに雷鳴、晴天と雖も俄かに雲を起し洪水漲り大風起りて人家田畑を損毫し或は火災を起し刃難に会い人民牛馬野獣鳥類に至る迄で病み付き死する者夥し里人之れを嘆き又は憐と思いければ一つの小社を建て数多の郷民鼓笛をならし唄い舞其の怨霊の悪念を鎮め安じ奉りければ忽ち忿怒鎮まらせ給ひしと云う其の後数百年を経て清和天皇の皇孫経基王の苗裔肥後の守源の朝臣頼清公当国に下向ありて後此の小社に参詣あり縁の起りを聞召すされ大願を発し数多の郷村に下知して大社に建立あり是れ康平年中の創建なり此の時不死後の霊瑞ありて坂本山王大権現と神号し奉

れりと承はり候<sup>45</sup>

村上頼清が山王社を勧請して始まる祭礼は、川中島の合戦で村上一族が滅亡したことにより一旦中絶する。しかし、慶長十年（1605）には再開されたことが以下のように記されている。

村上義清公御盛り迄では中絶なき由隅々其の後永く中絶したる儀は無之由天文年中義清公浪人後川中島合戦にて大祭礼は久敷中絶いたし候慶長十巳年四月松井上総介様御入群翌年より又々大祭礼は発り申候<sup>46</sup>。

鈴木は、この祭りの特徴を「春の農作祈願を基盤にしながらも、御霊送りや怨霊鎮めに諏訪や山王の祭祀の影響が加わった祭で、郷を単位とする大規模なものであった。元来は、雨宮・土口・生萱・倉科・森の五つの村が主体で、岩野・小森・東福寺も加わっていたという。明治二十二（一八八九）年までは、祭日の前日にあたる未の日に各村々を巡って歩いた。現在は雨宮地区（一二〇戸余）を中心として執行されている。」<sup>47</sup>と指摘している。

橋がかりの時に獅子のたてがみを水に流すのは雲井の前のたたりを川に鎮め送るためだと伝えられ、また祭具をすべて水に流すのも疫神を鎮めるためだとする。夕暮から始まる橋がかりの神事での川に逆落としになる獅子の荒々しいまでの所作は、鈴木正宗の言うとおりの御霊・怨霊の鎮めに相応しい<sup>48</sup>。

ところで、歌舞伎舞踊の「石橋物」において獅子が長い毛を振る毛振りの所作は、「髪洗い」と名付けられている。落合清彦・服部幸雄は、『歌舞伎事典』の「かみあらい 髪洗い」に以下のように記述する。「獅子の髪洗いは、たとえば長野県更埴市雨宮の御神事に、獅子が橋から水面すれすれに宙吊りになって獅子頭を振りまわす儀式（橋がかり）があることから、神事の獅子をめぐる民俗の反映が考えられている。」<sup>49</sup>

髪洗いとは、「鏡獅子」「連獅子」などの長唄の獅子物作品でも後ジテが立役となり、勇猛さを強調した獅子の狂いであるために能と女方舞踊には無



い独特な演出である。

服部幸雄『宿神論—日本芸能民信仰の研究』第四章「逆髪の宮」には、謡曲『蟬丸』<sup>50</sup>のシテの狂女の逆髪について論じている。服部は、「少なくとも近世初頭にあつては、女性の「逆立つ髪」は激しい嫉妬の心を象徴的に表現すると一般に認識されていた」<sup>51</sup>と指摘する。

「雨宮の御神事」の起源は、伝承によれば嫉妬に狂った女性の怨霊の鎮魂を目的としていた。「橋がかり」という神事が、歌舞伎の獅子物作品の民俗的基盤となっていたことを明らかにした。次に歌舞伎の獅子物作品の源流に立つ能「石橋」と橋との関係を見ることにする。

## 五、石橋—芸能と仏教の接点

前節での「雨宮の御神事」の山場「橋がかり」と同じ名前であるが、能の舞台構造に鏡の間から本舞台へとつながる「橋がかり」がある。能の橋がかりについて、山中玲子「能の舞台と演出・演技」に次のような指摘がある。

現在能の場合、橋掛は登場人物が歩む道となる。たとえば人商人にさらわれた我が子を探し求める母親が、自分の故郷から遠く離れた土地まで、狂女となって旅をしてくる、その道程を、橋掛は表現する。一方、夢幻能の場合、橋掛は現実の世界とあの世をつなぐ通路となる。—中略—そもそも「橋」にはそういう異界との接点というイメージがあることは、よく知られている。だから、能の橋掛に「あの世とこの世の接点」という意味が残っていることは、重要かつ本質的なことではある<sup>52</sup>。

能の本舞台は演者にとって現実から作品に描かれている異世界へと超越するための重要な役割を果たす場である。謡曲『石橋』は、文殊菩薩の浄土である聖地清涼山を背景にした能である。清涼山とは中国山西省五台山のことであるが、石橋そのもの<sup>53</sup>は五台山には存在せず、中国浙江省天台山にある<sup>54</sup>。

ワキ寂昭法師<sup>55</sup>は、山また山を踏みわけて文殊

菩薩のいる浄土、清涼山との境にある石橋の前にまで辿り着く。「あれに見えて候ふは石橋にありげに候。向ひは文殊の浄土、人を待ち詳しく尋ね、この橋を渡らばやと存じ候。」<sup>56</sup>物語世界において寂昭法師は、この橋を渡り文殊の浄土へ行こうと望んでいる。「さては石橋にて候ひけるぞや。さらば身命を仏慮にまかせ、この橋を渡らばやと思ひ候。」<sup>57</sup>寂昭のこの石橋を渡る決意は固いが、この橋が渡るに難しい危険な橋であることを現れた童子が説明する。「上の空なる石の橋、上の空なる石の橋、まづ御覧ぜよ橋もとに、歩み臨めばこの橋の、面は尺にも足らずして、下は泥梨も白波の、虚空を渡るごとくなり。危しや目も昏れ、心も消え消えとなりにけり。おぼろけの行人は、思ひも寄らぬ御事。」<sup>58</sup>

空高く架けられ、幅も一尺にも満たず、下は底知れないほど深い橋であると謡い、シテが中入りした後に地謡が続く。「それ天地開闢のこの方、雨露を下して国土を渡る、これすなはち天の浮橋ともいへり。」<sup>59</sup>詞章中に、橋が神代に始まる例として前述した「天の浮橋」が効果的に織り込まれている。

続いて石橋が人間によって建てられたものではなくおのずと出現したものであることを、地謡は説明する。

しかるにこの石橋と申すは、人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現して、続ける石の橋なれば、石橋と名を名づけたり。その面わづかに、尺よりは狭うして、苔はなはだ滑かなり。その長さ三丈余、谷のそくばく深き事、千丈余に及べり。上には滝の糸、雲より懸りて、下は泥梨も白波の、音は嵐に響き合ひて、山河震動し、雨土塊を動かせり。橋の景色を見わたせば、雲に聳ゆるよそほひの、たとへば夕陽の雨の後に、虹をなせる姿、また弓を引ける形なり<sup>60</sup>。

文殊菩薩の浄土との架け橋である石橋は、人智を超えた仏の加護を得た者でなければ渡ることはできない。修行を積んだ寂照でさえも恐れ戦くほど険しく厳しい橋だと表現されている。

石橋は、文殊菩薩の浄土という聖なる世界がいかに俗界と断絶して厳しく対峙するものであるかを描いている。高僧の寂昭も石橋の傍らで文殊菩薩の使獣である獅子が牡丹に遊び戯れる姿を見ただけで橋を渡ることはできなかつた。深い谷を隔てた向こうにある仏世界の超越性を石橋が見事に表現しているのである。

## 結

天と地とを架け渡す天の浮橋、恐ろしい異人と遭遇する戻橋・安義橋・瀬田橋、境の神として橋を行き交う人々を守る橋姫、御霊・怨霊を鎮め川に送りやる雨宮の橋がかりの神事、文殊浄土の遙かな高みを象徴する石橋、橋の境界性や両義性、また説話や伝承を産出する橋の象徴性を神話や説話、また民俗事象にわたって検討してきた。橋は二つの世界を架け渡すとともに、その両者を峻拒し、現実世界の彼方にある宗教的な超越性を象徴的に表現する働きがあった。謡曲「石橋」から読み取れる超越的な彼岸性を本論文の最後の結論としたい。

## 注

- 1 川田忠樹『橋と日本文化 増補版』大巧社、1999年6月、10頁
- 2 川田忠樹、前掲書、12頁
- 3 山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』(『日本古典文学全集1』)小学館、1997年6月、31頁
- 4 山口佳紀・神野志隆光校注・訳、前掲書、99頁
- 5 山口佳紀・神野志隆光校注・訳、前掲書、117頁
- 6 西郷信綱『古事記注釈第一巻』平凡社、1975年1月、102頁
- 7 青木和夫・石母田正・小林芳則・佐伯有清注『古事記』(日本思想大系1)岩波書店、1982年2月、319頁
- 8 山口佳紀・神野志隆光校注・訳、前掲書、31頁
- 9 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注訳『日本書紀①』(新編日本古典文学全集2)小学館、1984年4月、24～25頁
- 10 中村啓信訳注『新版古事記現代語訳付き』角川文庫、2009年9月、24頁
- 11 植垣節也校注・訳『丹後国風土記』(『風土記』『日本古典文学全集5』)第六刷、小学館、1997年10月、472頁
- 12 川田忠樹、前掲書、17頁

- 13 大林太良『銀河の道虹の架け橋』小学館、1999年7月、225、229～300頁
- 14 川田忠樹、前掲書、19頁
- 15 河村秀根・益根編著 小島憲之補注『書紀集解 三』臨川書店、1974年9月、820頁
- 16 青木和夫・石母田正・小林芳則・佐伯有清注『古事記』(日本思想大系1)岩波書店、1982年2月、319頁
- 17 植垣節也校注・訳『播磨風土記』前掲書、27頁
- 18 西郷信綱『古事記注釈第一巻』平凡社、1975年1月、102～103頁
- 19 西郷信綱、前掲書、102～103頁
- 20 相田洋『橋と異人境界の中国中世史』研文出版、2009年9月、第一部「境界の世界」第四章「橋と境界」第四節「橋と異人」(221～250頁)は、中国の文献に基づき記されている。たとえば『史記』巻55に橋で出会う老人が「黄石の精」であったこと、『列仙伝』(巻下)「陰生」には、「最も穢れたもの(乞食)が実は最も聖なるもの(仙人)である」という価値の転倒などの話を例に挙げている。
- 21 平林章仁『橋と遊びの文化史』白水社、1994年7月、9～24頁
- 22 小松和彦『妖怪文化入門』角川ソフィア文庫、角川学芸出版、2012年6月、131頁
- 23 小松和彦、前掲書、134頁
- 24 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集②』(『日本古典文学全集36』)小学館、2000年5月、271頁
- 25 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集②』前掲書、271頁
- 26 西尾光一校注『撰集抄』岩波文庫、1970年1月、210～211頁
- 27 松尾葦江校注『源平盛衰記 二』(中世の文学)三弥井書店、1993年5月、111頁
- 28 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集④』(『日本古典文学全集38』)小学館、2002年6月、46頁
- 29 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集④』前掲書、49～50頁
- 30 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集④』前掲書、46頁
- 31 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集④』前掲書、53～54頁
- 32 小峰和明『今昔物語集の世界』岩波ジュニア新書、2002年8月、65頁
- 33 小松和彦、前掲書、201頁
- 34 小峰和明、前掲書、2002年8月、52頁
- 35 神作光一編『歌学書被注語索引』新典社、1991年7月、49頁・152頁
- 36 柳田國男「橋姫」『一目小僧』(柳田國男全集7)筑摩書房、1998年11月、483頁
- 37 柳田は、「大橋など云う名にも似合はぬ僅かな石橋で、甲府市中の水を集めて西南に流れ、末は笛吹市に合する濁川と云う川に架つて居る。今の国道からは半里ほ

- ど南であるが、以前は此筋を往還として居たらしい。一説には大橋ではなく逢橋であったと云ひ、又育逢橋と云ふ別名もある。」と指摘している。柳田國男、前掲論文、483頁
- <sup>38</sup> 柳田國男、前掲論文、483～484頁
- <sup>39</sup> 柳田國男、前掲論文、484頁
- <sup>40</sup> 柳田國男、前掲論文、489頁
- <sup>41</sup> 『神道集』「橋姫明神事」（近藤喜博編『神道集 東洋文庫本』角川書店、1959年12月、208頁）
- <sup>42</sup> 柳田國男、前掲論文、495頁
- <sup>43</sup> 鈴木正宗「橋をめぐる神事—雨宮の祭りを中心に」『悠久』（特集神の橋）67号、1996年11月、25頁
- <sup>44</sup> 鈴木正宗、前掲論文、28頁
- <sup>45</sup> 長野県教育委員会編『雨宮の御神事』（長野県無形文化財調査報告書第2集）長野県教育委員会、1965年3月、86頁
- <sup>46</sup> 長野県教育委員会編。前掲書、1965年3月、87頁
- <sup>47</sup> 鈴木正宗、前掲論文、25頁
- <sup>48</sup> 鈴木正宗、前掲論文、28頁
- <sup>49</sup> 服部幸雄・富田鉄之助・廣末保編『新版歌舞伎事典』平凡社、1983年11月、131頁
- <sup>50</sup> 帝の子でありながら盲目のため捨てられた蟬丸の名は平安時代の文献から見えるが、逆髪については謡曲『蟬丸』以前には見当たらない。
- <sup>51</sup> 服部幸雄『宿神論—日本芸能民信仰の研究』岩波書店、2009年1月136～137頁。服部の指摘は、さらに次のように続く。「また「逆立つ髪」は決して単なる乱れ髪・蓬髪を意味する日常次元の姿ではなく、不具・業病または憑依によって荒々しい神に変身した者の超人間的な貌、グロテスクな貌として世間から忌避され、懼怖される存在と考えられていることが明らかになった。』『宿神論—日本芸能民信仰の研究』137頁
- <sup>52</sup> 山中玲子「能の舞台と演出・演技」服部幸雄監修『日本の伝統芸能講座 舞踊・演劇』淡交社、2009年2月、138～139頁
- <sup>53</sup> 円珍「在唐記」や成尋『參天台五臺山記』に記す石橋と現在の景觀がそれほど変わっていないことについては、実地調査をもとに斎藤忠の報告がある。斎藤の『中国天台山諸寺の研究—日本僧侶の足跡を訪ねて』第一書房、1998年12月には現在の石橋と瀧（石梁飛瀑）の写真を載せる。
- <sup>54</sup> 「石橋は本曲では清涼山の入り口にある橋とされているが、これは誤解で、石橋は天台山にある橋なのである。清涼山は五台山とも呼ばれるから、これと天台山とを混同したものか。」天野文雄「獅子の能と獅子舞」『観世』第48巻第4号、楡出版、1981年4月、5頁
- <sup>55</sup> 寂照と表記するのが普通であるが、このように表記されることもある、本稿では原資料に従う。
- <sup>56</sup> 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳「石橋」『謡曲集②』（『新日本古典文学全集59』小学館、1998年2月、584頁
- <sup>57</sup> 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳「石橋」、前掲書、585頁

- <sup>58</sup> 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳「石橋」、前掲書、586～587頁
- <sup>59</sup> 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳「石橋」、前掲書、587頁
- <sup>60</sup> 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳「石橋」、前掲書、587～588頁

#### 参考文献（刊行年月順）

##### 原資料

- 西尾光一校注『撰集抄』岩波文庫、1970年1月
- 河村秀根・益根編著 小島憲之補注『書紀集解 三』臨川書店、1974年9月
- 西郷信綱『古事記注釈 第一巻』平凡社、1975年1月
- 青木和夫・石母田正・小林芳則・佐伯有清注『古事記』（日本思想大系1）岩波書店、1982年2月
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注 訳『日本書紀①』（『新日本古典文学全集2』小学館、1984年4月
- 松尾葦江校注『源平盛衰記 二』（中世の文学）三弥井書店、1993年5月
- 山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』（『新日本古典文学全集1』小学館、1997年6月
- 植垣節也校注・訳『丹後国風土記』『播磨風土記』『風土記』（『新日本古典文学全集5』小学館、1997年10月
- 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『謡曲集 ②』（『新日本古典文学全集59』小学館、1998年2月
- 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集②』（『新日本古典文学全集36』小学館、2000年5月
- 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集④』（『新日本古典文学全集38』小学館、2002年6月

##### 研究書

- 長野県教育委員会編『雨宮の御神事』（長野県無形文化財調査報告書第2集）長野県教育委員会、1965年3月
- 服部幸雄・富田鉄之助・廣末保編『歌舞伎事典』平凡社、1983年11月
- 網野彦彦・大西廣・佐竹昭広編『天の橋 地の橋 いまは昔むかしは今2』福音館書店、1991年1月
- 平林章仁『橋と遊びの文化史』白水社、1994年7月
- 三浦基弘・岡本義喬『橋の文化誌』雄山閣出版、1998年6月
- 周星『境界与象征：桥和民俗』上海文艺出版社、1998年10月
- 柳田國男「橋姫」『一目小僧』（柳田國男全集第7巻）、1998年11月
- 川田忠樹『橋と日本文化 増補版』大巧社、1999年6月
- 大林太良『銀河の道 虹の架け橋』小学館、1999年7月
- 保田與重郎『日本の橋』（保田與重郎文庫1）新学社、2001年7月
- 山口昌男『文化と両義性』岩波現代文庫学術、2001年7月
- 小峰和明『今昔物語集の世界』岩波ジュニア新書、2002年8月
- 三隅治雄・大島暁雄・吉田純子編『中部地方の民俗芸能3』

---

(日本の民俗芸能調査報告書集成10) 海路書院, 2005年11月

小林幹男『祈りの芸能信濃の獅子舞と神楽』信濃毎日新聞社, 2006年8月

服部幸雄『宿神論—日本芸能民信仰の研究』岩波書店, 2009年1月

服部幸雄監修『日本の伝統芸能講座 舞踊・演劇』淡交社, 2009年2月

相田洋『橋と異人—境界の中国中世史』研文出版, 2009年9月

中村啓信訳注『新版古事記 現代語訳付き』角川文庫, 2009年9月

小松和彦編『妖怪学の基礎知識』(角川選書487) 角川学芸出版, 2011年4月

小松和彦『妖怪文化入門』角川ソフィア文庫, 2012年6月

#### 研究論文

天野文雄「獅子の能と獅子舞」『観世』第48巻第4号, 檜出版, 1981年4月

杉村弘「信濃の民俗芸能の民族音楽的研究—2—主として雨宮の御神事と坂白の太々神楽について」『心中大学教育学部紀要』第27号, 1972年

佐野賢司「橋の象徴性—比較民俗学的一素描—」竹田且編『民俗学の進展と課題』国書刊行会, 1990年11月

周星「橋の民俗—漢民族の橋の事例を中心に—」『比較民俗研究』第8号, 1993年

鈴木正宗「橋をめぐる神事—雨宮の祭りを中心に」『悠久』(特集神の橋) 67号, 1996年11月